



急流区間を巧みに操舵する筏師たち



日本森林学会による 日本の林業遺産を知ろう!

北山川の筏流し技術

東京大学 柴崎茂光

かつては、筏師が丸太で筏を組み、巧みに操舵して下流の貯木場に運んでいましたが、ダム、森林鉄道、林道の建設が進む中で、日本各地の筏流しの文化は1950〜60年代に消失する運命を辿ります。こうした中で、筏流しの技術を観光筏下り事業として復活させ、継承してきた稀有な事例が、今回紹介する北山川流域での取組です。

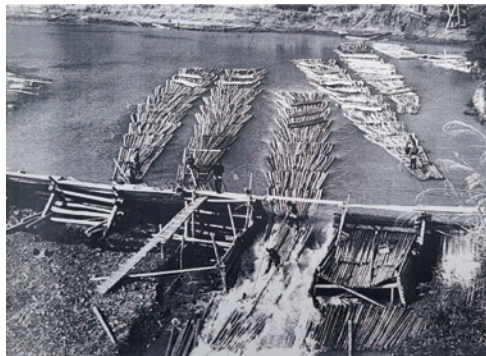
熊野川支流の北山川では、15世紀半ばから16世紀末には筏流しが行われていました。現在の行政区分でいえば、奈良県下北山村や和歌山県北山村の筏師が、「組」と呼ばれるグループを形成し、任された区間を引き継ぎました。上流から、景勝地として知られる静峡（どろきょう）を通過しながら、河口の新宮の貯木場まで、一週間程度かけて材を運びました。

北山川には瀬や滝が多く存在し、高度な操舵技術が求められました。水量の少ない支流では、運び出す丸太を使って人工的に堰を作って水を貯め、その堰を壊して材を運ぶ鉄砲流しも行われていました。高い操舵技術が評価され、明治末期から昭和初期には、現在の中国と北朝鮮の国境付近にある鴨緑江（おろしやま）に筏流しの出稼ぎに招かれた記録も残っています。

1950年代に入ると、熊野川流域での大規模なダム建設計画が進められ、流筏組合による反対運動の声も届かず、



新宮の貯木場



鉄砲流し



大正期の北山川筏流し



昭和初期の絵葉で紹介された筏流し



七色ダム



観光筏下り



特産品「じゃばら」の搾汁作業

七色ダム、小森ダムなどが相次いで建設され、1963年を最後に筏流しも途絶えました。1970年代半ば、筏流しを懐かしむ村民の声を受けて、高須治視村長（当時）は、観光筏下り事業を通じて、筏流しの文化を復活させる方針を表明します。近畿運輸局（当時）との数年間にわたる協議を経て、安全に配慮すること条件に、一部区間について、観光筏下り事業が特別に承認されました。1979年から観光筏下り事業は開始され、筏師の巧みな舵や權さはきはたちまち評判となり、コロナ禍前まで、毎年5,000人以上の安定した集客がありました。毎年5月3日から9月30日の期間に「オトノリー小松」の区間を70〜80分ほどかけて、1日2便の観光筏が運行しています。半世紀近く続く観光筏下りの事業で

すが、この間、官民が連携して難題を乗り越えてきました。当初、筏流しの経験者が筏師として活躍しましたが、高齢化が進みました。そこで北山村は、1998年から筏師後継者育成事業を開始し、1・Uターン者を筏師として育成してきました。2023年現在、16人の筏師がいますが、いずれも育成事業を通じて定着した方達です。また観光筏下り事業を運営しているのは、第三セクターの北山振興株式会社（以下、北山振興）です。安全運航のために、毎朝夕の筏の取り付け・外しの作業に抜かりはありません。通常運航とは別に、練習筏といった研修も頻繁に行い、安全性を高める地道な努力を行ってきました。さらに、観光筏下り事業だけでなく、村の特産品である「じゃばら」の栽培・加工事業、冬

季の間伐事業といった一次産業や、ごみ収集事業、プロパンガス販売、スクーパバス送迎事業も北山振興の職員が担っています。北山振興は、筏流しの文化を継承するだけでなく、北山村の産業・生活機能も支える中核的な存在といえます。

筏流しの文化が未長く継承されるためにも、ぜひ北山村を訪れて、観光筏下りを体験してみませんか。

写真提供：新宮木材協同組合、千葉県立中央博物館

参考文献：島田錦蔵（1974）『流筏林業盛衰史』吉野北山林業の技術と経済』土井林学振興会
北山村史編纂委員会（1987）『北山村史下巻』北山村役場